



アリク・カーシェンバウム著『まじめに動物の言語を考えてみた』「序章」より

闇夜に響くコヨーテの歌は、焚火のまわりで僕たちが歌うものとそう変わらない。毎朝鳥たちが鳴き交わすさえずりは、ヒトの家族や隣人どうしが目覚めて交わすあいさつのようなもの。ライオンの母親が、子どもたちに近づきすぎたヒトに放つ吠え声が警告であることに、異論の余地などあるはずもない。そうだ、動物たちも話すに決まっている！ こんな具合に、僕たちの遠い祖先は、動物にも人間と同じように魂があり、欲求や野心があり、そしてもちろん聞いてほしい物語があるはずだと考えた。おしゃべりな動物が登場する伝承はどの文化でも定番だ。

動物たちが何かを話すかもしれないという可能性に僕たちが魅了される理由の一部は、もちろんかれらの側にある。僕たちは動物が何を考えているかを知りたくて仕方がない。だが、それと同じくらい、僕たちの側にも理由はある。動物たちは心をもたないロボットではなく、僕たちの存在をもっとシンプルに、ひょっとしたらもっと望ましい形で、体現しているのではないか—そう信じたいという根源的な欲求が、ヒトにはあるのかもしれない。

(中略)

400年近く昔のルネサンス期の哲学者、ルネ・デカルトの教えにならい、動物は一切の内なる心的経験をもたず、かれらには認知的状態も認知的ニーズも存在しないとみなしたのだ。こうした前提に立ち、論理的に考えて、心のなかが空っぽなのだから何も話すことなどないとされた。実際、デカルトはヒト以外の動物を「自動人形」、すなわちロボットとみなした。

(中略)

過去400年間の近現代ヨーロッパの思想家たちは、森羅万象は一神の似姿として創造された人間を唯一の例外として一時計じかけの機械的法則に還元可能であると説いた。こうして、動物は話せないという考えが、西洋文化に居座りつづけた。

20世紀、ようやく科学が旧来の人間例外主義に異議を唱えはじめた。なぜ動物がそこまでヒ

トと違っていなければならないのだろうか？ いくら僕たちのふるまいがほかの動物とはまったく異なり、ずっと複雑で高度な技術を生み出すことができるからといって、そこから単純に、僕たちが本質的に違う部品でできているとはいえない。ヒトも、ほかのすべての現生の動物たちも、びったり同じ38億年という年月にわたって進化しつづけてきたし、動物界のすべての種は、もとをたどればひとつの共通祖先に行き着く。

(中略)

進化の視点に立つことで、科学は「常に人類の優位性を実証せねばならない」という、哲学の足枷から解き放たれたのだ。

アリク・カーシェンバウム著 『まじめに動物の言語を考えてみた』 的場知之訳 柏書房2025年



円山応挙 《狗子図》 (部分) ミネアポリス美術館